

不定名詞“on”の汎人称性について

田 口 紀 子

0. はじめに

フランス語で不定代名詞と一般に言われている on は、その用法の多様さから見ても、他の人称代名詞とは性格を異にしているのは明らかである。大ざっぱに言っても on の用法として次の三つを挙げることが出来る：1)「一般に人は」の意、2) je, tu, il etc.等の人称代名詞の代わり、3)特に口語で人称代名詞 nous の代わり。辞書の語義分類もだいたいこの三点を巡って行われている。しかし、この説明では、二つの基本的な問題が残るように思われる。すなわち一つは1)－3)の価値がその結果として出てくるような on 固有の統一の意味が明らかでないこと、第二に、1)－3)の用法の相互の関係の説明がなされていないことである。

まず第一点の統一の意味に関しては、例えば *Trésor de la langue française* の on の項目の最初に次のような定義がみられる：Pronom personnel indéfini de la 3^e personne, invariable, faisant toujours fonction de sujet. これは文法的機能からだけの説明と言えるだろう。もし1)－3)の意味的機能を統一的に述べようとすれば、「on は全ての人称代名詞の代わりに用いられることができ、定名詞句、不定名詞句のどちらも指せるが、ただ humain なものに限られるという制限がある」ということになるであろう。そこから on を単なる human subject marker と見る考え方（西村、土井）が出てくるのも当然のことかも知れない。しかしそれでは on 自体は固有の意味構造を持たないことになってしまい、特に2)のケースでは人称代名詞と等価と見なされることになる。すると例えば子供に向かって：

1) Tu as été sage, mon enfant?

と言うのと：

2) On a été sage, mon enfant?

と言うのは全く同じ意味なのだろうか？ 後述するように、そこにニュアンスあるいは発話主体の態度の違いが認められる以上、on に他の人称代名詞にはない、ある固有の価値を認めざるを得ないのは明らかであろう。

第二点については、特に上記1)と2)の用法の関係が問題になる。すなわち1)の「人は誰でも」の意味では on は不定人称代名詞であり、不定な指示対象を指す。ところが2)の用法で

は、on は人称代名詞の代わりに用いられ、従って je, tu, il 等が指す特定な指示対象を指していることになる。この 1) と 2) の用法を矛盾なく説明するのはむずかしく、on の統一的意味構造を目指した最近の研究でも、上記三つの用法をそのまま羅列する結果となってしまうている。Violet も整理しているように、Muller は 1) indéfini (=les gens) 2) stylistique (=je, tu, il, etc.) 3) personnel (=nous); Boutet は 1) énonciateur inclu (=nous) 2) énonciateur exclu (=je, tu, il, etc.) 3) n'importe qui (=les gens); Atlani は 1) rumeur publique (=les gens) 2) nous 3) anaphorique (=je, tu, il, etc.) とそれぞれ観点は異なっているが、基本的には我々が括弧に補ったように、上記の三用法の分類にだいたい一致するのである。

1. 人称代名詞と on

上記第二点の指示対象の定・不定の問題は、人称代名詞と on の関係という最も重要な問題に結び付いている。

人称代名詞とは特定の人間を指すのに用いられるのだが、いま単数に話を限って言えば、je, tu と il とでは、その指示対象の限定のされかたが異なる点で、はっきり分けて考えなければならない。Benveniste の指摘¹⁾を待つまでもなく、人称代名詞 je, tu は、それぞれの発話行為の場の中でその指示対象が決まる性質を持っているのに対して、il の指示対象は発話行為の外にあるものである。別の言い方をすれば、je, tu はその発話行為自体の中で限定される指示対象を指し、il はその発話に先行して談話で出たある名詞句の anaphorissant²⁾であるという意味で、その指示対象が限定されているのである。従ってこれら三つの定代名詞はお互いに排除し合う性質を持っている。発話者が je とすることによって、共発話者 tu が定位され、そこから除外されたものとして il が定位されるのである。

このような人称代名詞の性質と対比させたかたちで、on の持つ固有の価値について、次のような作業仮説をたててみたい。

- 1) on は限定された指示対象を指すことが出来ない。すなわち、on はその本来の意味での代名詞ではない。
- 2) on の固有の意味内容は「人は誰でも」であり、これは 1－3 人称代名詞間に前提される相互排除的対立を含まない、汎人称的概念である。
- 3) on は具体的コンテクストで、より限定された指示対象を持つことがあるが、それは on の意味内容の不定性に由来するところであり、人称代名詞としてそれらの指示対象を限定的に指示しているのではない。ある文脈で on が何を指しているかというのは解釈のレベルの問題であり、on 自体の意味内容は常に不変である。

まず仮説1) についてであるが、on が不定なものを指すと言われるときの「不定」とは、どんなものでも指せるということではなく、défini なものは指せないという意味である。on が時として je, tu, il 等の定代名詞の代わりに用いられるとしても、それは限定された指示対象を指すそれら人称代名詞と等価な代名詞として用いられているのではなく、異なった意味内容を本来持っているところからくる特殊な意味作用を必ず伴っているはずである。

仮説2) の汎人称性に関しては、これまでも別の言い方ではあるが、同じ主旨の指摘がなされている。まず Weinrich³⁾は、on について《la neutralisation de l'opposition des trois communicants : locuteur vs. auditeur vs. référent》(p.78) の働きがあるとしているし、Tamba-Mecz は《on [...] neutralise l'opposition entre indices personnels interlocutifs et hors interlocution》と述べている。青木は on に「対話の場における人称代名詞の解体による脱中心化」(p.21) ならびに「事態の場における事態参与の主体の無差別化」(p.21) の機能を認めている。すなわち on には、その指示対象を特定しないという性質があり、そこから「人称の中和」「無差別化」という指摘が出てくるのである。しかし我々が特に強調したいのは、この「中和化」が、on が固有の意味や指示対象を持たない単なる主語のマーカであるところに由来するのではなく、むしろ積極的にある行為に je, tu, il の全てがかかわっていることを示しているという点である。そこに on 固有の積極的な意味内容を認め、上で見た on の三つの用法全てをそこから導き出し、統一的な説明を与えるのが、本稿の目的である。

仮説3) は、on と他の人称代名詞が équivalent であるか concurrent であるかという問題に関わっている。青木の指摘の通り、on の解釈は文脈による限定があってはじめて可能である。例えば同格におかれた代名詞や名詞句があれば、on の指示対象はそれによっておのずと明らかになる：

3) Les filles, on est prêtes? (on=les filles)

4) Nous aussi, on travaille. (on=nous)

また、目的補語として別の人称代名詞がきている場合は、その代名詞は on の指示対象から自動的に除外される。

5) On nous a dit d'entrer⁴⁾. (on≠nous)

6) On ne te demande pas ton avis. (on≠tu)

そしてこのような文脈による制限がない場合は、on はその本来の意味、すなわち「人は誰でも」で解釈される。

7) On a souvent besoin d'un plus petit que soi. (Trésor)

しかしこの文脈による限定と言うのは、on がその文ではどのような指示対象を持っているかを明らかにするものではあっても、必ずしも on の意味内容を制限するものではない。むしろ on 自体の意味内容が不変であるところから、人称代名詞を用いた場合には生じないような、一種レトリ

ックな意味作用が生まれているのである。

以下、on が人称代名詞の代わりに、つまり人称代名詞と *équivalent* なものとして用いられていると従来見なされてきたケースを検討しながら、1)－3) の作業仮説を立証して行きたい。

2. on と je

on が je の代わりに用いられている二つの場合を取り上げてみよう。まず、一般に ‘on dans le préface’ と呼ばれている用法がある：

- 8) Le travail dont on expose les résultats dans cet ouvrage a été compris par nous comme l'expérience d'une méthode grammaticale. (Robert/Trésor⁵⁾)

Robert の説明によれば、このような序文での主語としては、je, nous, on が可能であるが、Brunot et Bruneau は、その *Précis de grammaire historique* の中で、on は *modeste* であり on を用いることによって *encombrant* な je, *prétentieux* な nous を避けることが出来る、と述べている。Trésor も同じ例文を挙げて、je が *discretion*, *pudeur* をもって on の不定性の後ろに隠れると説明している。すなわち発話主体を je と特定してその存在を主張する代わりに、一般に人を表す on を使うことで控え目な印象を与えるのである。ところが、その on の使用が逆に傲慢な態度を表すこともある：

- 9) Et puis, on est bourgeois de Gand. (Trésor)

10) Ma belle mine fit le reste, car il faut bien dire qu'on sait se présenter. (Trésor)
ここでは on の持つ一般的な性格が、話者が自分自身に与えている重要性を示している、と Trésor は説明している。

つまり on が持つ汎人称的な意味内容の結果、あるコンテキストでは控え目な、別のコンテキストでは傲慢な印象を与える効果を持つのである。その効果は文章全体の意味内容や談話の場によって決まるのであり、on 自体にはいかなるレトリックな意味もない。また on を je の代わりに用いることでこれらの付帯の意味が生じるとしたら、それはとりもおさず on が je と *équivalent* ではないからに他ならない。

3. on と tu (vous)

3-1. tu (vous) défini

on が特定の共発話者を指すとされている典型的な例に、いわゆる ‘on hypocoristique’ がある。

11) On a été sage, mon enfant?

特に話し手に対して親しみを表したいときに, tu ではなく on を用いる用法である。これはもちろん on が親しみをこめて用いられる用法という意味ではなく, tu を使った場合よりも on のほうがより親しみの感情がこもるということで, これは on が tu とは異なった意味内容を持つことに起因している。

ところで, 同様の効果を持つ代名詞に nous があり, 青木の興味深い指摘がある。

12) Nous avons été sage, mon enfant? (青木)

と呼びかけることによって, je/tu の対立が解消し, 同時に共発話者は発話者の「身内」の扱いを受けるので, 発話者は共発話者を反駁の出来ない従属主体として把握する, というものである。従って「身内」としてあつかえない知らない子供に対しては, この nous を用いることができず, on だけが可能となるという。

13) a. Alors, on n'est pas content de jouer au cheval? (青木)

b. ? Alors, nous ne sommes pas content de jouer au cheval?

つまり nous は三人称を排除することによって, 共発話者と発話者の一体感とそれに伴う従属関係を強調するのに対して, on はいかなる発話の場においても前提される, 発話者と共発話者, 第三者の相互排除的対立を解消することによって, 親しみの感情を表すのである。このように, on, nous がともに親しみを表すことができるのは, それぞれが tu とは異なった意味内容を持っているためなのである。

3-2. tu (vous) indéfini

tu (vous) 自体, 特定の共発話者を指すばかりではなく, 一般に「人は」の意味を持つことがある。その不定の二人称代名詞と on が入れかわることが観察される。

14) non mais/imagine que t'as un garçon par exemp' que t'auras un garçon pi que/ton garçon i t'demande euh j'voudrais une poupée eh ben tout d'suite on va se dire euh ça y est mon fils il a des tendances euh (Viollet)

15) le maître d'hôtel [...] faisait d'un coup de sa cuiller sauter pour vous le morceau qu'on choisissait (Robert)

16) Et quand on venait la voir, elle ne manquait pas de vous apprendre qu'elle avait abandonné la musique [...] Alors on la plaignait. (Robert)

この場合の on は, 本来の「人は誰でも」という使い方である。on と tu/vous は équivalent に用いられている。これらはむしろ, tu/vous の非限定的用法として考えるべきであり, 特定の共発話者を指す tu や vous の代わりに on が用いられる, 上記 3-1 のケースとは性格を異にする。

4. on と il(s) défini

on がはっきりと il(s) défini の代わりに用いられているとわかる用例はそれほど多くない。

Trésor, Robert の両方が次の例を挙げている：

17) Et puis, tu me diras si l'on a eu du chagrin en concernant mon départ... Si l'on a pleuré!

—— Qui ça, mon commandant? —— Eh parbleu! elle! Anita. (Trésor/Robert)

発話者は on と言うことで Anita を指したかったのだが、そのことと、on が elle と同じ機能を果たしているかどうかとは別のことである。むしろここでは on がそれ自体としてははっきりと限定されたある人物を指さないという点の上に、会話が進行しているのである。

実際 Boutet は、ils défini と等価の on の例は、Frei⁶⁾があげている次の二例しかないと述べている。

18) Voilà qu'après dîner, tous ces messieurs on était là à fumer autour de moi.

19) Les vieux, on fait moins de chichi que les jeunes, mais on a les bonnes méthodes.

しかも、19) の例は 'Les vieux, nous, on...' と解釈されるべきであり、残った 18) ただ一例から現代フランス語における ils défini の意味の on の用法を主張することはできない、としめくくっている。しかし 18) に類した例は他にも見つけることができる。

20) M.X. présenta ses invités à sa femme, puis on se mit à table. (Muller)

21) (Le médecin) porte des ongles sales... Tandis qu'il trotte à ses malades, elle (=sa femme) reste à ravauder des chaussettes. Et on s'ennuie! (Trésor)

20) では on は M.X, sa femme, les invités を指し、21) では sa femme を受けているように見える。しかし、20) では、on が前述の名詞句をそっくりそのまま受けるというよりは、紹介の場面とは違った新しい場において、改めて「テーブルにつく」という行為の主体を把握しなおしている印象を受ける。18) の例においても同様である。'Voilà qu'après dîner' と場面の転換を明示する句によっても、同一の名詞句を同一の場で連続した時間の流れの中で受けていく ils とは違って、on が何等かの主体の把握の仕直しを行っていることが伺われる。さらに 21) に関して Trésor は、《une nuance ironique, voire de dédain》を認めている。これは言うまでもなく elle を用いれば出ないニュアンスであり、ここからも on が anaphorique に前出の名詞句を受ける il(s) défini と等価ではなく、独自の意味内容「人は誰でも」を持った名詞相当句であることがわかる。

on が elle の代わりに用いられているもう一つの例として Robert がひいている一節を見てみたい。これは Stendhal, *Le Rouge et le Noir* 中の、Julien が Madame de Rênal の手を握ろう

と決意して、それを実行する下りである。

- 22) Enfin, comme le dernier coup de dix heures retentissait encore, il étendit la main et prit celle de Mme de Rênal, qui la retira aussitôt. Julien, sans trop savoir ce qu'il faisait, la saisit de nouveau. Quoique bien ému lui-même, il fut frappé de la froideur glaciale de la main qu'il prenait; il la serrait avec une force convulsive; on fit un dernier effort pour la lui ôter, mais enfin cette main lui resta.

この on は明らかに Madame de Rênal を指している。しかしここで elle とせずに on を用いることによって、elle と lui の二人の個人の対決であったものが、lui と lui 以外の人間の対立に置き代わって行く。気が動転した Julien が相手をもはや Madame de Rênal とはっきり認識せず、むしろ自分以外の全ての人間、自分にとっての潜在的な敵であって征服すべき人間たちを象徴するものとして捉えていることが、この on の使用によって示されているのである。そしてこの on と共に、最後の部分《on fit un dernier effort pour la lui ôter, mais enfin cette main lui resta.》で、我々読者は語り手の視点から Julien の視点に移動する。主人公にとってはレナール夫人は不在であり、彼女が自分にその手を委ねたのではなく、その「手」が自分に残ったのである。

5. on と nous

5-1. nous indéfini

- 23) Quand on veut quelque chose dans l'existence on y arrive. (Boutet)
 24) Moi j'ai fait une connerie dans la vie — on en fait souvent. (Boutet)
 25) elle[...]lui gardait au fond de son cœur cette place chaude, abritée, où l'on revient comme au refuge quand la vie nous a blessé. (Robert)

これらは on の「一般に人というものは」の意味がそのまま現れた用法である。この「人は誰でも」という概念を人称代名詞で置き換えるならば nous, それも「彼（等）と私」、「あなたと私」といった特定の人物を指す nous défini ではなく、不特定の人間を指すからこそその中に「私」も含まれるような nous indéfini となるのである。

5-2. nous défini

on が特定の「我々」を指すときには、これまで見た特定の指示対象を持つ je, tu, vous, il(s) に代わって用いられるケースと同様、そこにレトリックな価値がつけ加わる。

- 26) On a ses idées, dans la famille. (Muller)

Muller は、この文が 'Nous avons nos idées, dans ma famille' の意味だが、《connotation

ironique ou autre》が加わっていると説明している。

少し話がそれるがここで注目したいのは、これまで見てきたいずれの用法でも、同一節内では on の目的補語，所有形容詞，強勢形に se, son, soi が用いられることである。

27) Alors, on est content? On s'est amusé avec ses amis? On est resté chez soi? (on=tu)
(Muller)

28) On accueille tel personnage sous son toit, qui ensuite vous jette hors de votre maison.
(on=vous indéfini) (Muller)

29) On ne tremble jamais que pour soi, que pour ceux qu'on aime. (on=nous indéfini)
(Robert)

ちなみに、26) でも所有形容詞 ses が用いられている。

ところが、現代フランス語の口語において on が nous défini の代わりに使用される時は、所有形容詞，強勢形に notre, nous の形が用いられるのである。

30) Quand est-ce qu'on va rentrer chez nous? (Muller)

31) Ne le répète pas; mais les copains et moi on espère avoir bientôt une revue à nous.
(Muller)

Muller はこの統辞的な違いから、口語におけるこのような on の用法を、他の用法と分けて考えるべきだと主張している。

しかしこの統辞的な違いはそれほどはっきりしているわけではない。まず目的補語には口語における nous の代用の場合でも se を用いる。

32) Dis, Boudousse, qu'est-ce qu'on va se payer comme queuleton tous les trois, pour fêter ça!... (Muller)

つまり、口語において nous 系列の主格だけが on におき代わっているという事情ではないのである。さらに、口語における nous に代わる on の所有形容詞として notre ではなく son が用いられている例もある。

33) Avez-vous jamais tiré sur des hommes? — Jamais, dit Mathieu [...] — On fera de son mieux, dit Pinette d'une voix étranglée. (Robert)

この on の例は Robert が langue familière で nous の代わりに用いられる例として 'On y va?' 等と並べて出しているものであるが、notre とはならず son となっている。それではこれは26)のように、nous défini に代わる on の修辭的用法なのだろうか？

33) の例にレトリックな意味を読み取るかどうかは微妙な判断であるが、いずれにせよ、元来 nous défini に対しては26) の様な修辭的用法しか持たなかった on が、次第に口語で nous の統辞系列を共有するようになる過程でその修辭的価値を失いつつあると考えるのが妥当ではないかと思われる。この口語における on の nous défini への転用は、nous が本来持っている汎人称性 (nous

indéfini) 故のものと思われるが、本稿では考慮の対象から外すことにしたい。

6. on と ils indéfini

本来の意味「人は誰でも」で使われている on が、そのコンテキストからそこに発話者や共発話者が含まれていないことがはっきりしている場合には、不定の ils と同じ意味になると解釈される。

34) On nous a reclassés comme ça — à droite et à gauche. (Boutet)

35) Bon je vois sur le journal qu'à la SKF on embauchait. (Boutet)

36) La colère monte en Italie. On estime que les autorités[...]sont aussi coupables de n'avoir pas su imposer une réglementation. (Atlani)

37) Mariette, l'ombrelle et l'écharpe; on s'impatiente peut-être à la maison. Vous savez que Monsieur revient de bonne heure. (Trésor)

34) は目的補語の nous によって35) 36) はそれぞれの副詞句によって、37) は動詞の意味から、on の意味内容から一、二人称が除外されることが明らかである。

しかしこれらの on と、いわゆる不定の ils が全く等価であるかという点、必ずしもそうではない。確かに、不定の ils はそのまま on で置き換えられることが多い。

38) a. Une épicerie modèle, qu'ils disent. (Trésor)

b. Une épicerie modèle, qu'on dit.

39) a. Ils racontent que vous ne vous nourrissez point. (Trésor)

b. On raconte que vous ne vous nourrissez point.

40) a. Le jour où ils m'ont arrêté, j'allais vous rejoindre. (Trésor)

b. Le jour où on m'a arrêté, j'allais vous rejoindre.

逆に上の34)－37)における on はすべて ils と差し替えられる。

34') Ils nous ont reclassés comme ça — à droite et à gauche.

35') Bon je vois sur le journal qu'à la SKF ils embauchaient.

36') La colère monte en Italie. Ils estiment que les autorités [...] sont aussi coupables de n'avoir pas su imposer une réglementation.

37') Mariette, l'ombrelle et l'écharpe; ils s'impatientent peut-être à la maison. Vous savez que Monsieur revient de bonne heure.

ところが次の例では、on は ils に置き換えることができないのである。

41) a. On frappe à la porte.

- b. ? Ils frappent à la porte.
- 42) a. On vous demande au téléphone.
- b. ? Ils vous demandent au téléphone.
- 43) a. Pardon, Monsieur, voilà deux heures qu'on appelle de Zurich. Ils demandent une réponse. (Trésor)
- b. ? Pardon, Monsieur, voilà deux heures qu'ils appellent de Zurich. Ils demandent une réponse.

つまり on よりも ils の方が、使用の制限がきついことがわかる。

おそらく、不定の ils が使用できるためには二つの条件が必要である。すなわち第一に、その指示対象の個別的 *identité* は不明であっても、その指示対象が属すクラスが特定できていなければならない。第二に、そのクラスに発話者、並びに共発話者が属してはならない。それに対して、on の方にはそのような指示対象に関する制限はいっさいないと考えられる。41)–43) で ils が使えないのは、ノックしている人、電話をかけてきている人が、どのような立場の人であるかという情報がないからである。すなわち、第二の条件が満たされていても、第一の条件が欠けているために、on しか許容されないのである。ちなみに ils に置き換えることのできた34)–37) では、このクラスの特定がいずれも可能である。34)では会社の上司、35)ではSKFの人たち、36)ではイタリア人たち、37)では家族を、個体としては漠然と、しかしクラスとしては特定の指している。

ところで、43)の例で、二番目の文章に ils が用いられている点に注目して頂きたい。すでにはじめの文によってチューリッヒから電話をかけている人、というクラスが特定されているので ils が可能なのである。しかし、ここでは電話をかけてきた人物はおそらく一人なのであって、それがわかっている状況で複数形の ils を用いるのは不自然ではないのだろうか。しかし、我々が実際に遭遇した場面でも同様なことがあった。電気工事の人が事務所を出たことを知らせる電話で、その事務所の人は ‘Ils sont partis.’ と言ったのである。ところが、工事に来た人は一人だけであった。一人だけだからと言って、この場面で発話者と共発話者が共に特定できる人物を指すときにしか使えない単数の il を用いることができないのは言うまでもない。従って数の一致を無視する形になっても、カテゴリーだけを指定する ils を用いたのであろう。この複数はいずれも、指示対象の個体の複数性を指すと言うよりも、個体の（特定のカテゴリーの中での）任意性を表していると考えた方が良いのではないかと思う。

ところでこの場面では on は用いられないのだろうか？ 34)–37) の用例を見ると、ここでも発話者、共発話者以外の人間をさして ‘On est parti.’ と言っても良いように思われる。しかし ils を用いることによって、その指示対象が、発話者、共発話者とは別のクラスの人間であることを強調できるのは明らかであり、このような「(パトロンヌである) 私」「(客である) あなた」「(職

人の) 彼ら」という役割の相互対立の意識が ils を選ばせたといえるだろう。

7. 結論

以上の検討を通してはじめに出した作業仮説の妥当性が検証できたと思われる。以下、補足しながら簡単にまとめておきたい。

- 1) on はそれ自体の固有の意味「人は誰でも」を持つ実名詞であり、限定された指示対象を指す人称代名詞とは性格を異にする。

on が定代名詞 je, tu, vous, il(s), nous の代わりに用いられているように見える場合は、必ず何等かの修辭的意味が加わっているのであって、これらの定人称代名詞と équivalent ではないことは、見た通りである。さらに、on が代名詞ではなく名詞の性質を持っていることを裏付ける事実がいくつかある。まず人称代名詞の主格の形は複数の動詞を続けてとれるが、on は動詞のたびに繰り返されなければならない。

- 44) a. Il frappe, entre, s'assied et se met au travail.

- b. On frappe, on entre, on s'assied et on se met au travail. (Muller)

次に on の目的補語、所有形容詞等は、同一節内では se, son の系統を用いるが、節が異なれば、on の内容に応じて nous, notre, vous, votre etc.を用いることができる。

- 45) On ne refuse pas le bonheur, quand il frappe à votre porte. (Muller)

- 46) Qu'on hait un ennemi quand il est près de nous! (Muller)

また on の後に形容詞系の語が属詞としてきた場合は、on の指示対象と性・数が一致する事がある。

- 47) On est tous égaux devant la mort. (Robert)

- 48) On était une trentaine, et assez serrés, car on n'ouvrait pas le petit salon [...] (Trésor)

これらはいずれも、on の指示対象がそれぞれの談話において判断され、それに対して一致が行われているということで、on 自体が意味内容が全ての指示対象をカバーできる「人は誰でも」であるからこそ可能な現象なのである。

さらに on には本来主格の形しかないこと、また定冠詞をつけることができることなども、on の名詞性を支持する論拠となるであろう。

- 2) on は 1 - 3 人称間の対立を含まない「人間一般」を意味する。

それぞれの談話の場で on がある特定のカテゴリーの人間を指したり、さらには特定の人物を指したりする場合があるが、それは on 自体の意味内容が変化しているのではなく、「人間一般」という不特定なシニフィエによって、誰を指すのかという言語記号の使用の問題である。コンテ

クストからの制限が特に何もない場合は、on はそのもっとも広い指示対象を維持する。コンテクストから自由な格言や諺などに用いられる on が、ほとんどの場合「人は誰でも」の意味を持つことは改めて指摘するまでもないだろう。しかし何らかの制限があれば、それに応じてその指示対象を自由に縮小することができる。

49) On nous a dit qu'on pouvait entrer. (Muller)

のように、同じ文の中で二つの on が外延の異なった指示対象を持つことが可能なのは、on がそのつど解釈される名詞だからである。

- 3) 人称代名詞は anaphorisant であるので、それ自体の意味内容を持たず、既出の定名詞句、あるいは談話の場で同定できる発話者、共発話者を直接指示する。それに対して on は固有の意味内容「人は誰でも」を持ち、そのシニフィエが何を指示対象とするかは、発話の場で判断される。

on があるコンテクストで je, tu, il などの人称代名詞と同じ指示対象を持つとしても、それはそれら人称代名詞を用いた場合のような直接的な指示ではなく、その意味内容に与えられた解釈としてであり、そこに必ず修辭的意味が生じる。

8. 「語り」における on の機能

最後にこれまで見てきたような on の特徴が、語り、それも特に語り手が表面に出ない三人称の語りの中で果たしている機能を見ておきたい。

- 50) Les monnaies d'or furent longtemps regardées avec suspicion par les Romains. On leur reprochait de ramasser sous un trop petit volume des valeurs considérables. Aussi exigeait-on des peuples vaincus que les indemnités de guerre fussent payées en monnaies d'argent[...] (Atlani)

Atlani は、ここでの on は 'les Romains' を指しているが、語り手である歴史家は、ローマ人達に組みしているような印象を与えると述べている。もし on ではなく ils が用いてあればそのような含みはあり得ない。on のもつ汎人称性故に、語り手も行為主体の中に含まれる解釈が可能であるところから、そのような印象を与えるのである。さらに on に潜在的には二人称(この場合は読者)も含みうるところから、語り手みずから、そして我々読者もが語られている事件に立ち会っているような、強い臨場感の効果もあげることができる。次は Le Goff, *Les intellectuels au Moyen Age*⁷⁾からの引用である。

- 51) On le (= Abélard) met au défi d'en faire autant. Il relève le gant. On lui représente que, s'il connaît à fond la philosophie, il ignore la théologie. Il réplique que la même

méthode y peut suffire. On invoque son inexpérience. (p. 43)

- 52) C'est là (=à l'Université de Paris) qu'on est le plus près du peuple des villes, du monde extérieur, qu'on se préoccupe le moins d'obtenir des prébendes et de déplaire à la hiérarchie ecclésiastique, qu'est le plus vivace l'esprit laïc, qu'on est le plus libre. (p. 127)

ここでのonが指示しているのはアベラールの反対派の人々 (51)、パリ大学の人々 (52) であり、史実の記述であるため、そこにはもとより語り手や読者が含まれるはずはない。しかしonの使用によって、je, tuすなわち語り手と読者もその行為に関与しているような印象を持たせるのである。そして特に、どちらの場合も語りの時制が直説法現在形になっていることに注目して頂きたい。Weinrich³⁾によれば、直説法現在形は、複合過去、単純未来と共に“temps du commentaire”を構成し、他方半過去、単純過去、大過去、前過去、条件法は、“temps du récit”を形作る。本来半過去や単純過去を用いて語られるべき歴史上の事実が現在形で語られているのは、「語りの時間」と「語られる事件の時間」が交錯し、語り手、そしてその語り手と「語りの時間」を共有する読者とが、その事件の場に居合わせることである。このような時間の交錯とonの使用とが、無関係でないことは言うまでもないだろう。

最後に三人称客観小説の創始者といわれる Flaubert の小品から一節を引用したい。物語の主人公である女中 Félicité と彼女が働く家の家族がよくピクニックに行った、というくだりである。

- 53) Quand le temps était clair, on s'en allait de bonne heure à la ferme de Geffosses. La cour est en pente, la maison dans le milieu; et la mer, au loin, apparaît comme une tache grise. Félicité retirait de son cabas des tranches de viande froide, et on déjeunait dans un appartement faisant suite à la laiterie. (Flaubert, *Un Cœur simple*)

Balzac や Stendhal の小説で、語り手が読者に話しかけたり、物語の途中で自説を延々と展開したりするのと違って、Flaubert の作品では語り手は表に現れない。しかしいわゆる「神のような偏在性」をもって全ての場面、登場人物の内面に立ち会い、語られる一連の事件に物語世界としての統一を与えていることは、別の機会に見たところである⁴⁾。ここでのonの指示対象は、フェリシテとオーバン家の人々であるが、ここに登場人物達と行動を共にする語り手の存在が感じられないだろうか？ 破線をほどこした現在時制での情景描写とあいまって、我々読者もその場面に連れて行かれるのである。

このようにonはその汎人称性によって、語りの行為に於ける人称間の対立、すなわち「語り手」「読者」「語られる物語」の間の対立を解消し、「語る行為」と「語られる物語」のともすれば制度化して行こうとする二律背反を打ち破り、より自由で柔軟な語りの行為への可能性を開くものであると言えるだろう。

NOTES

- 1) Benveniste, (E.) 'La nature des pronoms' in *Problèmes de linguistique générale*, 1, Gallimard, 1966, Paris, pp. 251-257.
- 2) anaphorisant, anaphorisé の概念については Milner, (J.-C.) 'Coréférences et anaphores' in *Ordres et raisons de langue*, Seuil, 1982, Paris, pp.31-42.
- 3) Weinrich, (H.) *Grammaire textuelle du français*, Didier, 1989, Paris.
- 4) 例文, 引用文中の下線・破線は, すべて我々が便宜上施したものである。
- 5) Robert, Trésor の例のほとんどは文学作品からのものであり, それぞれの出典も示してあるが, 煩さになるのでは本稿では出典はいちいち記さない。
- 6) Frei, (H.) *La grammaire des fautes*, 1929, réimprimé par Slatkine, 1982, Genève.
- 7) Le Goff, (J.) *Les intellectuels au Moyen Age*, Seuil, 1985, Paris.
- 8) Taguchi, (N.) 'Essai d'analyse d'une structure narrative — le cas d'*Un Cœur simple*' à paraître in *Equinoxe*, n°7, 1990.

REFERENCE

- Atlani, (F.) 'On L'illusioniste' in *La langue au ras du texte*, PUL, 1984, Lille, pp. 13-29.
- Boutet, (J.) 'La concurrence de "on" et de "i" en français parlé' in *Linx*, n°18, 1988, Nanterre, pp. 47-66.
- Muller, (C.) 'Sur les emplois personnels de l'indéfini on' in *Langue française et linguistique quantitative*, Slatkine, 1979, Genève, pp. 65-72.
- Tamba-Mecz, (I.) 'De la double énigme de "on" aux concepts de pronom et de personne linguistique en français et en japonais' (manuscrit), 1990.
- Violet, (C.) 'Mais qui est on?' in *Linx*, n°18, 1988, Nanterre, pp. 67-75.
- 青木三郎 「人称に関する日・仏対照言語学的研究」『文芸言語研究・言語編』n°16, 筑波大学, 1989, pp.1-44.
- 土井隆広 「代名詞“on”に関する一試論」『年報・フランス研究』n°23, 関西学院大学フランス学会, 1989, pp.109-122.
- 西村淳子 「代名詞“on”の使用について」『立命館文学』n°501, 立命館大学, 1987, pp.1042-1062.
- Robert *Dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française.*
- Trésor *Trésor de la Langue Française.*